

Title	資本の本質に関する一論争 (二)
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.5 (1922. 5) ,p.723(143)- 736(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220501-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の商工業政策の發達に關して、他の如何なる方面にも優りて、最良の説明を得べきが故である。(Unwin: Daniels' Early English Cotton Industry Introduction p. 2) 吾人は、此産業方面に就いて、

中世的經濟組織より近世的經濟組織に到る變遷の最も明白なる説明を求むるを得るであらう。

既に述べし如く、近世英國の工業に於て、技術と經濟との分離は先づ羊毛工業に生じ、企業家たる Clothier は生産の全過程を經濟上に組織し、統一する。斯くて後の所謂「マニユファクチュリア」及機械的生産等の工場制度による英國近世資本主義的大工業の發達も其端緒を羊毛工業の domestic system に發すと云ふべきである。

而して、Gross の謂へる如く、「Merchant」なる語は、小商人と手工匠を含む Guild Merchant より、工匠を除外し小賣、卸商人のみを抱含する Companies of Merchants を通じて、更に大

商人のみより成る Staplers 及 Merchant Adventurers に到る各三個の階程によつて其意義の變遷を示して居る。(Gross: Guild Merchant p. 157)

而も Merchant Adventurers に於けるが如く、社員たる大商人が、一定の規定の下に、各々自己の資本を以て貿易をなす regulated company 制規會社の制度は中世經濟より近世經濟組織への過渡期の産物である regulated company は唯一歩にして近世的 Joint-Stock Company の制度に達するを得るのである。Joint-Stock Company の發生の爲に必要な制度は既に發達し、唯適當なる機會の刺戟あるを待てるのみである。(Scott: Joint-Stock Companies to 1720 vol I. p. 15)

而して英國最初の Joint-Stock Company たる一五五三年設立のロシア會社及、一段、制規會

社として設立せられ、後、株式會社となれる、英國東印度會社等に關する諸問題に就ては他日を期すべくして、本稿に於て述ぶべきでない。(完)

附記、本稿作成に當り、恩師阿部先生に種々の御指導を受け、毎號豫め御校閲を賜はつた。筆者は茲に厚く御禮を申し上げねばならぬ。又、長く此費しい本稿のために貴重な紙面を割いて下された本誌編輯者の御寛恕に對して茲に感謝せねばならぬ。

資本の本質に關する

一 論争 (二)

金原賢之助

四

然らば「何人が、將來の財に對して割引を爲す目的の爲に、此用具の生命に依りて示された期間を、計算するの機會を持つや。」クラーは述べ、「若しも所有者又は使用者が機械の

餘剰の所得を他のものを購入する償却基金として蓄積するならば、彼が此基金を銀行より引出す其時は彼にとりて新しき享樂を意味せざるなり。其は唯用具を更改することなり。所有者が享樂を期待し得る唯一のものは、此機械のみよりはならずして其(機械の)連續全體より彼に入り來る所の他の限りなく連續する所得なり。而して其連續する所得は永久的利子を構成するなり。吾人の公式に於ては此は「所有者は永久的資本より永久的生産物を期待するのみ」と云ふことなり。特定用具の更改せらるゝ時以前の期間の長さは、彼にとりて、何等重要にあらざるなり。」(Clark, The Origin of Interest, Quart. Jour. of Eco., vol. IX, p. 273)之に従へば、利子と生産期間とは關係なきものと言はざるべからず。即資本財の生産期間に關して自説を述べたるクラーは、更に「生産期間を延長することは

消費財の一層大なる結果を意味するや』と自問しつゝ、生産期間は延長せらるゝも投資せられたる資本に對して短き時と同利率を生ずることを論じたり。是利子の普遍率説なり。今彼の意見の大意を觀るに「道具と機械とは再生産を要する程度に於ては相異なれども、純粹の生産力に於ては相違することなし。dam, race, wheel等々は殆んど無限に存續するが如く堅固に建設することを得。然るに engine 及 boiler は二十五年の後には更新せられざる可らざるべし。彼等が兩者とも用ひらるゝならば、商業上の事實として彼等の兩者とも彼等が代表せる永久的資本に對して利子を支拂はざる可らず。若し各々が十萬弗の費用を費せしならば、又各々の場合に於て投資が思慮あるものならば、各々は其持主に一年約五千弗の純額を拂ふべし。蒸汽設備は利子の外に一年約四分を自身の更改の爲に

なり。

蒸汽機關の製造者は消耗したる設備を補充することによりて間接に日々毛布を造りつゝあり。engine に對して dam を代用するならば、之等の人々の多くを其器具の製造より休ましめ、而して彼等をして彼等が以前間接の方法によりて作りたる布を直接作らしむるを得。其何れの場合に於ても彼等は働くに従つて日々其れを得るなり。されば一の明かなることは、特定の資本財の變形する時期によりて示さるゝ生産期間は、産業の生産力に影響することなくして、延長せられ成は短縮せらるゝを得ると云ふことなり。

たゞ一事のみが、ボエム・バヴェルク教授の研究に於て此期間を延長すること、關聯せる結果を生ずべし。其は、他の用具を再生するにはあらずして社會の資本に對して純増加を形造る

産出せざるべからず。即其は利子なる五分に附加して、年々其れ自身の貨幣價値の『二十五分ノ一』を創造するなり。

さて、産業の生産力を變更することなくして、蒸汽機關の代りに水堰及貯水地を代用することを得べし。而も其變化は生産期間を非常に長期ならしむ可し。即蒸汽機關は其を運轉して後二十年内に毛布に變形せらるべし。然るに水堰は吾人の計算する如何なる期間内にも斯く變形せられざるべし。斯る變更を爲すに當りても吾人は其産業の生ずる所得の額を變せず、又其所得の得らるゝ日時をも變更せざるなり。水堰の場合には、吾人が資本の組織と稱する所のものを僅かに消費し、而して其消費を恢復する爲に少しの勞働を費す、従つて水堰は迅速には消耗せざるなり。蒸汽機關の場合には、組織を多量に消費して、多大の勞働が其れが恢復の爲に費さる

所の用具を、造ることなり。他の new engine を作れば、其は資本を作ることなり。古きものを再生するは唯資本を保存することなり。

new engine を作ることとは生産期間を長からしむるや。其は寧ろ全く新しく連續する期間の始りなり。其は他の engine 等の存續期間によりて圖られたる期間に影響を及ぼさず。

其は總ての期間の平均を長からしむるや。其は、engine の存續期間が總ての他の用具の平均存續期間より長きか或は短きかによりて異なるなり。例へば一週間に於て消耗し去る所の短期間の道具を作り、以て社會全體の資本に増加を爲すことを得。其れは勿論吾人の今述べし間接の方法にて其期間内に其れ自身の後繼者を作ること。而して此短期間の道具を連續して作ること。は、永久的に總ての生産期間の平均を減ずるの結果を持つなり。

斯る連續を作ることが生産の迂回的方法を選ぶこと、等しきか。注意深き條件を以て吾人は之を肯定す。其道具を使用する企業家は、彼の産業中に、其道具製造人の仕事の結果を引き入れるものと云ふことを得。即此後者の仕事は間接に企業者の生産物に貢獻するなり。

其間接の方法が効果あるは何故なりや。効果を増大する唯一の原因は道具其ものなり。何故増加が永久的なりやの理由は、得られたる道具の連續が限りなきものなりと云ふことなり。節慾は全然新なる用具の連續を活動せしむ。其連續の各々は労働者の手をして一層能率あらしむるものなり、(Ibid. pp. 273-278) 云々と述べる。たる彼は「生産期間の研究は資本が永久的となる構造を明かならしむ。其は、利子の原因は資本其ものにして本来其れを造るに要する時間には非ることを示すなり。従つて利子の率に影響

する原因は資本其もの、額に於ける變化にして生産期間を長短せしむることにあらず。社會的元本を大ならしむれば、利率を小ならしむるを得るものなり。其れ故資本財及其生産期間の研究は、其が利子と稱せらるゝ所得を生ずる永久的社會的要素の研究に導くが故に、利子問題を解決するを得るなり、(Ibid. pp. 277-278) と結論し、以て利子は生産期間とは關係なきことを明かにせり。元來彼の利子普遍率説は彼が資本抽象説を固執する以上主張せざる可らざるものにして、又之を主張するが故に彼の資本々質説を生ずるものなり。

五

今吾人はクラークの説の大要を觀察したるを以て次にポエム・バヴェルクの駁論に耳を傾けんと欲す。ポエム・バヴェルクは、クラークが「若しも吾人が道具の活動の結果を、消費財が其活

動の結果として残る點の方へ求め行くなれば、吾人は求むる點に達することなくして永久に其れに従ふ可し。生産期間は文明と共に始り而して終りなきなり。彼等を延長することは不可能なり、」云々と述べたるに對して明言して曰く「Positive Theory」の讀者は其八十八頁に於て殆んど之を同じ言葉をして同じ思想を説明せしを見るべし。然れども彼(クラーク)は之と共に生産期間の計算には二方法ありと云ふ事實の詳細なる説明を見るべし。人は絶體的期間(absolute period)を参照することを得。其は、最初の手がその最初の仲介生産物の製造に下されたる瞬間より其財そのもの、完成に迄計算せらるゝなり。然し又人は、原始生産力、労働、及土地の效用—如何なる仕事に於ても引續きて用ひらるゝものとしての—の消費と完成されたる消費財の製造との間に、平均して、經過する期間を參

照することを得。余が迂回的なる生産過程の擴張或は延長に關して、又資本主義の程度に關して意見を述べし場合には、今説明せし意味に於て解釋せられざる可らず。過程の長短、其擴張或は縮少は労働の最初の原子と最後の原子との消費の間に存する絶體的期間によりて測定せらるべきにあらず。而も労働及土地效用に於ける繼續的の消費と最後の財の獲得との間に存する平均期間によりて測定せらるべきなり。従つて生産期間の延長は或る他の意味に於て不可能なりと云ふクラークの議論は、彼の主張せざる説に反對して向けられたる議論なるが如く思はるゝなりと。而して「余の意味に於て期間を延長することが、一般に、投資せられたる資本の増加と平行して進むと云ふことは、其がクラーク教授にとりて彼の理論の説明に於て明かなり得るが如くに、余の理論の説明に於ても余にとり

て明白なることなり。此延長せられたる生産期間と増加せられたる資本の投資に於て何れが原因にして何れが結果なりやに關して彼が余と意見を異にするは、吾人の根本的觀念に於ける相違に基くものなり。」(Böhm-Bawerk, The Origin of Interest, Quar. Jour. of Eco., vol. IX, pp. 383-385.)

ボエム・バツエルクの見解は斯くの如くなるが、此點に關して、クラークに一般に反對の立場に在るタウシグ(Tausig)は如何なる意見を抱懐せるやを参照すれば次の如し。曰く「繼續せる分業の下に於て、生産行程が延長せらるるか或は短縮せらるるか云ふは、輕卒なるべし。何となれば、發明界に於ける泡立及殆んど如何なる方面に於ける新方法の幽なる出現も、尙は斯る結果を可能ならしむるものなればなり。生産行程の終りを定むるは事實困難ならず。其は

享樂の始る時即消費者が食し著し住し以て何等かの方法に於て彼の満足或は快樂に資するものを得る時に始るなり。然れども生産の過程が其起原を有する點を指示することは決して容易にあらず。パンは麥粉より作られ、麥粉は穀物より作られ而して播種は生産行程の出發點なり。されど其種子は前の季節に成長したるものなり。鋤も亦種子の播かる、以前に作られ、其鋤は他の道具より作られ、又其道具は如何。されば平均生産行程は如何なる長さかと云ふことは事實上不可能なり。茲に於て吾人は實際斯る場合の平均と云ふ意味を想像することを得るなり。吾人は、家庭の召使の勞働は極めて早く享樂を生じ、棉花工場の勞働者の其れは數週若しくは數ヶ月の後に、百姓の其れは一年の後に、船大工の其れは數年若しくは數十年の後に享樂を生ずと言ひ得べし。若し吾人が短き行程

と長き行程とを比較するならば、吾人は吾人の現在の享樂し得る所有物を作るには、平均して、如何なる長さの期間を要せしかを確むる可し」(F. W. Tausig, Wage and Capital, 1915, pp. 10-12)と。以て彼の意見の概要を知るを得べし。

六

クラークが水車工場と蒸汽工場の例を用ひ、假令兩者の生産期間は、water-mill の生産期間が dam, race, wheel-pit 等の生命の長き爲に一層長期なるを以て、不同のものなりとは言へ、投せられたる資本に對して同利率を生ずるものなりと爲したる主張は、亦ボエム・バツエルクの辯駁する所となれり。即言へり、「彼(クラーク)は此例に於て、生産期間は生産力に影響することなくして延長し或は短縮することを得と云ふ證據となせり。而して明かに、生産期間を長く

することは生産行程を一層效果多きものたらしむと云ふ余の斷定に反對する議論をなせりと信するが如し」。

「クラーク教授の議論は、ボエム・バツエルクの解釋に依れば「productivity」と云ふ言葉の用法に於て彼が明かに看過せる曖昧に基けるが如く思はるゝなり。引用したる例に於て同じ大きさの産業の生産力(Equally great "productivity of industry")と云ふ句に依りて、彼は投資せられたる資本に對する同率の利子と云ふことを意味す。然れども余の説に於ては其言葉は全然異りたる事柄に關するものなり。其は、原始生産力(original productive powers)の一單位の消費に對して——即各一日或は各一月の勞働に對して——人は同じ大きさの生産物を得るか、或は或場合には他の場合に於けるよりも大なる生産物を得るか否かと云ふ考察に關するものな

り。讀者は、生産期間の長さの不同の場合に於て、最初の意味に於ける同一生産力と第二の意味に於ける同一生産力とは相互に一致するに及ばざるのみならず又一致するを得ざることを容易に感知すべし。」(Böhm-Bawerk, op. cit., p. 385)と述べて、此場合にも亦クラークの反對説は全く的を逸せるものなることを斷言し、以て巧に其鋭鋒を避けたり。而して此斷言を確實ならしめんが爲に簡單なる一例を以てせり、「一〇〇日の労働の費用は、賃銀が一日二弗なる場合に、一年の生産期間の終りに於て各個二弗一〇仙の價值ある一〇〇個の貨物を産出すべし。之は二〇〇弗の投資せられたる資本に對して一年一〇弗の利益又は五分の利子を生ずることなり。若しも生産期間が二年にして技術的生產が同一ならば、即一〇〇日の労働及二年の生産期間の生産物が同一貨物一〇〇個なりとするなら

ば、投せられたる二〇〇弗の資本に對して二年間に一〇弗の利潤あるべし。其れ故資本は二分五厘の利子を生ずるに過ぎずして、クラーク氏の解するが如き“productivity of industry”は減少す可し。若しもクラーク教授の意味に於て、生産力が減少することなく存すべきならば、余の用ふるが如き“technical productivity”は二年の期間に亘る行程に於ては明かにより大ならざる可らず。若しも二年の期間に於て人が一〇〇日の労働を以て一〇五個の貨物を生産するならば、二二〇弗五〇仙の結局の收入或は資本に對する一年五分の利子となるなり。」(Böhm-Bawerk, op. cit., p. 386)斯る例を以てすれば敢て彼の結論を待つまでもなく、クラーク教授の意味に於ける equal productivity of industry は必然彼の意味に於て unequal productivity を意味するものなること明かなるを得べし。何と

なれば、平均生産期間及資本の投資期間が水車工場の場合には實際より長期ならば、その期間に對して同一利率を擧げ得んが爲には、水車工場に費したる労働の技術的生產力も亦より大ならざる可らざればなり。茲に於てか斯る意見の對立は、洵に其根本概念の不同に歸せざるを得ざるなり。

七

然らば目下の問題は如何。其はボエム・バヴェルクに従へば「吾人が『資本』に依りて生産用具——正確に言へば其概括的名辭が適用せられたる用具——の金額を意味することが明白ならざるや否や」と云ふことなり。而して尙ほ彼の意見によれば、「資本は森林が樹木の數、人口が人民の數而して圖書館が書籍の數たると正に等しく、生産用具の換言すれば資本財の金額又は數」たるなり。

此點に關してクラークの抱ける見解は即ボエ

ム・バヴェルクをして最も首肯せしむること能はずして近來學界の焦點となりし論争を惹起するに至らしめたる所以なり。今クラークに對するボエム・バヴェルクの駁論の要點を次の數點に分ちて論述せんと欲す。

第一は、クラークは屢々彼の根本的觀念と矛盾するが如き資本に關する説明を與へたることなり。換言すれば、彼は先きに資本は永久的に存續する元本にして、而して此元本が一定の時期に於て具體化する、所の資本財と區別せらるゝものなりと言へるにも拘らず、往々彼は資本は具體的物件より成るが如く思はする言辭を弄するの撞着に陥れるなり。例へばボエム・バヴェルクの引用せる所に依れば、「資本は生産の用具より成立するものなり。而して之等は常に具體的にして物質的なり。」(Clark, The Distribution of Wealth, p. 116)「資本は自存する財より成る

(Ibid., p. 265)「其れを(資本を)構成する具體的事物……」(Ibid., p. 269)「其れを構成するに資する各用具」(Ibid., p. 335)「鐵道の資本は旅客及貨物を運送する爲の用具の具體的物質的設備なり」(Ibid., p. 249)「世界の資本は吾人にとりて『勞作する人類の手に在る一大道具』の如く思はる——『人類が自然の抵抗する要素を征服し變形するに用ふる甲冑』の如くに想はるゝなり。」(Ibid., p. 117)

斯る矛盾的説明は、たゞにボエム・バヴェルクがThe Distribution of Wealthより引用したるものノムにあらず、彼の Essentials of Economic Theoryを繙讀する者も亦其幾多の章句に於て感知する所なり。

茲に於てボエム・バヴェルクは問ふ、「此人類の裝具(equipment 上記の甲冑を指す)は具體的物質的生産用具の全體にして、(クラーク教授自

身の言葉に従へば)其れよりして資本亦是成立し組織せらるゝなりと云ふことを、正に記述せし説明よりして吾人は誤れるものと考ふるや或は單に明かなることと考ふるや」と。而して亦曰く、「一組の物體が消失して他のものが其れに代りて現はれし時、吾人は資本は繼續すと言ふ。而も文字通りに繼續的存在を有するものは唯抽象に過ぎざるなり。其抽象の具體的に表現せしものはたゞ一時的の存在を有するのみなり。斯く解すれば純粹資本(pure capital)は、客觀的には決して抽象ならずと雖、抽象に於ける資本と稱せらるゝを得べしと、クラーク教授は主張せらる。永續的の true capital は『具體的物質的』なり、『具體物』なり、『抽象ならずして而も物質的實在』なり、と言ひし場合と、『而も文字通りに繼續的存在を有するものは唯抽象に過ぎず、』而して消失する資本財は其抽象の具體化された

ものなりと言ひし場合との間には、如何に顯著なる矛盾の存するにあらずや」と。(Böhm-Bawerk, Capital and Interest Once More: I. Capital v. Capital Goods, Quar. Jour. of Eco., vol. XXI, pp. 6-12)

然れども右に擧げたるが如き語句を以てクラーク其人の眞意を盡くしたるものと推定するは聊か早計に失するの嫌あり。字句を正確に用ふべきことの肝要なるは茲に喋々するまでもなきことなれども、斯る章句は米國學者が不用意の間に用ひたる誤りと看做すべきか。彼も亦「之は不思議にもクラーク教授の結論にあらず」と述べて、彼の尊敬する反對者の最も力を注ぎたる點を探求せり。是第二の非難の起る所以なり。

第二は資本の permanency に對する非難なり。クラークは永續(permanence)と云ふ事實を以て

吾人が資本と稱するもの、最も顯著なる一の事實なりとなせり。産業が成功的ならば、其は永續すべし、而も永續せざる可らざるなり。其を侵害せよ——其若干を破壊せよ、然らば人は不幸を蒙るべし。而も人は失敗せざらんが爲に資本財を破壊せざる可らず。資本財を破壊せざるやう保持するならば、資本の一部を破壊せしめし場合に蒙ると同様の不幸を感ずるに至るべし。資本と多くの資本財との間の最も顯著なる對象點は、實に一方の消失性に比較せられたる他方の永續性なりとす。斯くの如きクラークの説に對して、ボエム・バヴェルクは彼の誤謬は單純なる例にても明かならしむるを得べしとて、次の例を以て之を指摘せんとせり。十二人の採るべき食卓が皿、臺皿、スプーン、ホーク、ナイフの如き具體的事物の實際量より成立せることを、何人か疑はん。此場合に之等の個々の物

は滅失を免れず、従つて主婦は破はれ又は用ひ盡くせしものを徐々に取換へることによりて、絶えず元の儘役立たしむるを得、茲に於て吾人も亦對語を用ひて『其用 (service) は残れども其個々のものは消滅す』と云ひ得べし。何人か、此事情の上に或は寧ろ此言葉の用法の上に、其用は其個々のもの、全體、同一にあらず而も全く異なる實在なりと云ふ學問的結論を、基けんと欲する者ありや。此は如何なる種類の實在なるべきや。一種の精神として皿及ナイフに具體化する所の、或る異なる精神的實在なるものありや。斯る觀念は不合理なり。或は恐らく全く何等の實在なかるべく、唯言葉の一式に過ぎず、單なる抽象に過ぎざるなり。』(Bismarck, op. cit., p. 8) 尙ほ又彼は『一要塞の衛兵』の例を挙げ、之に於ても、守備隊は數世紀を通じて永續すれども其兵隊の一人は然らずと

本に關して三個の事實のみを念頭に上げせしむす。一年の後に他の貨物が同一の三個の特徴を有することあるべし、即同一概念が彼等に適用せらるゝなり。彼等も亦『余の十萬弗の資本』たるなり。されど此は二つのものが實際同一なることを意味するものにあらず。前年の所有物の一個も今年に残らざることあるべく、今年の所有物は各種の點に於て前年の其れとは相違して唯『十萬弗の余の資本』を特徴付ける三點に於てのみ同一なることあり。此程度の繼續も同一概念の適用を是認するに足る。然れども其繼續する要素は資本財に具體化されたる或ものにあらずして、全く抽象なる或特徴の單なる結合に過ぎざることとは明かなり。何ものか資本財に具體化するものありとせば、其は彼等と異なる何ものかにあらず、而も單に彼等の定義なり。』(Ibid, pp. 9-10)

言ひ得べけんも、要塞の守備隊によりて爲さるべきものは其が何なりとも又彼等に對して起るべきものは其が何なりとも、其個々の人々によりて爲されざる可らず或は彼等に對して爲されざる可らざるなり。同様に、資本に對して起ることは其れを構成する所の資本財に對して起らざる可らず。然らずんば全く起ることなかるべしと爲せり。

斯る見地より出發して彼はクラークの permanent, unchanging fund なるものは單に抽象として思索の範圍内に於いてのみ存在すべきものなることを言へり。例へば「本年十萬弗の價値に達する原料品及機械を有し翌年同價値の資本を有すとすも、其存する所のものは同一の資本にあらず。吾人は現實の事物が年々共通に有する或性質を抽象的に思考することを得。例せば十萬弗の余の資本を考ふる場合に、其資

第三はクラークの Capital-goods 及び Abstr-action との區別の曖昧なることに對する駁論なり。true capital は決して獨立して存在するものにあらずして、具體的資本財に其結合することによりてのみ存在すと云ふことを是認するならば、資本財より分離したる資本には何等具體的物質的のものなしと云ふ明白なる駁論も、之を避け得らるゝなり。然れども斯る辯證法を用ふることは極めて輕率にして、却て無意識に反對の證據に陥るが如く思はるゝなり、とボエム・バヴェルクは論せり。クラーク教授は彼自身の理論を保持するに當りて讀者に提言して、讀者は彼(クラーク)の所謂價値の元本の中に存する抽象性を、讀者自身の思想中に於て其れに(右に述べたるが如くに)形態を付與することにより

て、『物質的實在』に變せしむるに至るべしと。斯くの如く吾人の思想中に具體的資本財を有することの必要なることが、具體的資本財より以外の何ものかが具體的物質的實在を構成すと云ふことの何等かの證據なりと、眞面目に想像せらるべきか。之に反して、其は之等の資本財が其唯一の具體的事物を構成することの明白なる證據にはあらざるか。之と同様の辯證的方法によりて、美德或は善の概念の如き最も疑ひなき抽象が具體的事物に變せられ得と云ふことを、クラーク教授は認めざるや。之等の抽象を具體化することは具體的美徳ある人に關係してこそ思考し得らるゝなり。

而して、吾人は抽象の方法によりて、具體的資本財及變移する資本財より資本の概念を演繹することを得るなり。其概念が活動も生産も爲さざること、鐵槌の概念が釘を打込むことな

新刊紹介

小島昌太郎著「海商國の立場から」

四六版三七六(外に英文四〇)頁

定價 金貳圓 五十錢

京都東京、内外出版株式會社發行

本書は著者が海商國の立場から論述して大部分は既に新聞や雜誌の上で發表した近作數篇を纏めて作つたもので、章を分つこと八。今、その内容の大綱をば讀過の際の感想を交へつゝ紹介する。

第一章「海商國の立場から」は、本邦の最高經濟政策の基調をなせる人口問題は海商國として立つことによつて始めて解決せられ得るといふことを述べたのであつて、大體に於て著者の「海運經濟論」第一卷第二章の論旨をば敷衍詳説したものと云ひ得る。既に海商國として立つとすれば活動舞臺たる世界貿易界の状態を知るの必要がある、そこで第二章で「世界貿易の發達と

きが如し。若し吾人が生産上に於る何等かの現實の効果を資本に歸せんと欲するならば、吾人は常に具體的資本財を意味せざる可らず。クラーク教授は資本の抽象概念と具體的資本財との間に第三の概念を挿入せんと試み、而して此第三のものに物質的實在としての現實の存在を歸せんとするなり。されど其は誤謬に過ぎざるなり。クラーク教授は、彼の創造が、彼或は經濟學を誤謬に陥らしめざるやうに護り、若しくは何等かの援助を與ふるものと、考ふるは誤りなり。之等の問題の學問上の取扱に於ける進歩は、全く相異なる區別——而もクラーク教授の顯示せざりし區別——に基くが如く思はるゝなり。即其區別とは生産資本と消費資本との間に於る區別なり」(Bohm-Bawerk, op. cit., pp. 13-14) (未完)

その現状」を叙するのであつて、主要國三十九ヶ國の貿易をば種々の見地から詳密な統計を以て説示して居り本章の紙數の七割は實に是等の數字のみを以て埋められて居るが、その中には、世界の貿易(金)額に物價指數による修正を加へて作れる近似的貿易數量(八九一九〇頁)、陸上貿易と海上貿易との割合(九一二頁)及び無形輸出としての貨物運賃収入の程度(九四一六頁)航路別世界貿易表(九六一—〇二頁)の如く海運の立場から見ても意義深きものが含まれて居る。唯最後のものに就て更に慾を云へば、此の表に對せしむるに航路別就航船腹量を以てすること Sargent が Seeways of the Empire に於てなせるが如きを得ば、困難は困難なるべきも益する所は更に大なるものがあらうと思ふ第二章は「世界大戰が日本の經濟に及ぼせし影響」と題するが、經濟各方面に關する簡單なる敘述は紙數の三分の一を數字を以て埋むる卷末の英文一篇を以て之に充てゝある。

著者は海運が貿易補助の機關として重要なる